

上の林遺跡

長野県箕輪工業高等学校小体育館建設に伴う
上の林遺跡の第6次緊急発掘調査報告書

1993年

箕輪町教育委員会

上の林遺跡

長野県箕輪工業高等学校小体育館建設に伴う

上の林遺跡の第6次緊急発掘調査報告書

1993年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 堀 口 泉

現在、県立箕輪工業高等学校が所在する一帯は、以前より数多くの遺物が出土するところとして、上の林遺跡の名称で周知されております。町教育委員会は、過去5回にわたって行われた校舎改築に伴う本遺跡の緊急発掘調査を実施して、記録保存に努めてまいりました。

この度、同校校庭の一部に小体育館を建設する事になり、確認調査を実施いたしました。この結果、学校関係者並びに県教育委員会文化課と協議を重ね、本遺跡の第6次緊急発掘調査を行う運びとなりました。

調査の結果につきましては、本報告書に確認調査と本調査を併せて記述させていただきます。本書が過去の調査結果とともに遺跡の性格や地域の歴史を学習する一助となれば幸いに存じます。

今回の発掘調査にあたり、深いご理解とご協力をいただきました県教育委員会文化課並びに学校関係者、調査団員の皆様方に、心から感謝とお礼を申し上げます。

例　　言

1. 本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地他に所在する上の林遺跡の第6次調査報告書である。
2. 発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。確認調査を平成4年6月23日から6月29日まで行い、本調査を平成4年9月22日から10月7日まで実施し、引き続き整理作業及び報告書の執筆作業を行った。
3. 本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。
 - ・土器の接合・復元－福沢幸一
 - ・石器の石質鑑定－樋口彦雄
 - ・遺構図の整理・トレース－赤松　茂、根橋とし子
 - ・遺物の実測・トレース－赤松　茂、宮脇陽子
 - ・土器拓影－根橋とし子、宮脇陽子
 - ・挿図作成－赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子
 - ・写真作成・図版作成－赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子
4. 遺構図は、次の縮尺に統一した。
小窓穴－1：20、土坑－1：40
5. 遺物実測図は、次の縮尺に統一した。
縄文土器・須恵器拓影図－1：3、土師器－1：2、石器－1：3
6. 土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帶の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。
7. 土層観察は、新版標準土色帖(小山正忠、竹原秀雄編・著者)を参考にした。
8. 本書の執筆は、赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子が分担した。
9. 本書の編集は、赤松　茂、根橋とし子、宮脇陽子が行った。
10. 出土遺物及び図版類は、すべて箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

本文目次

題　字

団長 橋口 彦雄

序

教育長 堀口 泉

例　言

本文目次

挿図目次

表　目　次

図版目次

第Ⅰ章 遺跡の立地	1
第1節 位 置	1
第2節 自然環境	2
第3節 歴史環境	3
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 調査に至る経過	5
第2節 調査団の編成	5
第3節 調査日誌	6
第Ⅲ章 遺跡の状態	7
第1節 調査方法と結果概要	7
第2節 土層堆積状況	7
第Ⅳ章 遺構と遺物	11
第1節 検出遺構遺物	11
第2節 出土遺物	12
第Ⅴ章 まとめ	14

挿図目次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	4
第3図 調査区設定図	8
第4図 トレンチ設定図	9
第5図 グリッド設定及び遺構配置図	9
第6図 土層断面図	10
第7図 小豎穴実測図	11
第8図 土坑実測図	11
第9図 出土遺物実測図・拓影図	13

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	3
-------------------	---

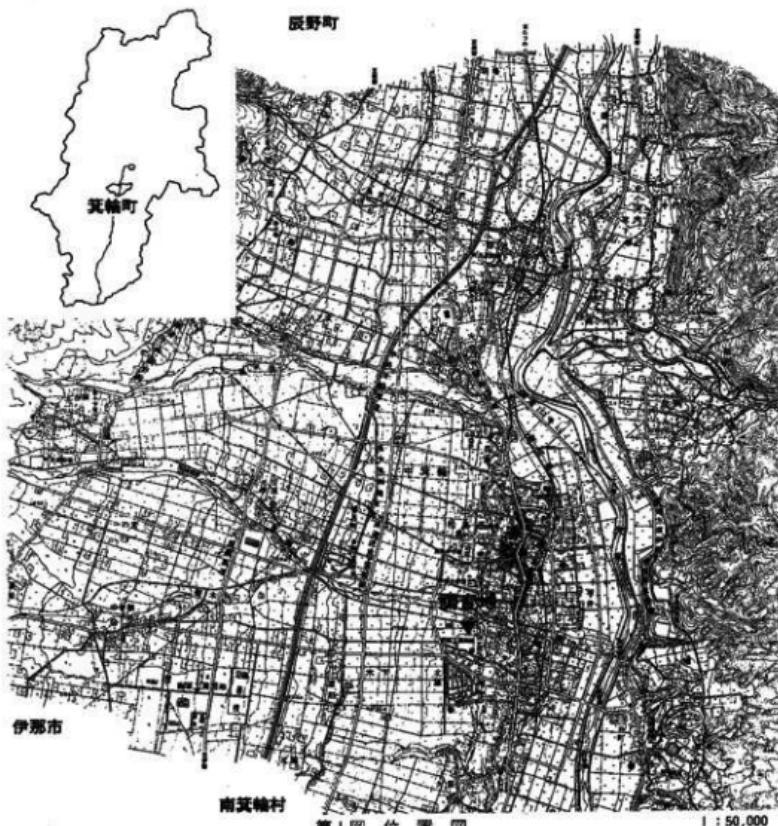
図版目次

図版1 調査区近景（南東より）、トレンチ掘削状況（東より）
図版2 調査区全景（東より）、A トレンチ土層断面、B トレンチ土層断面
図版3 C トレンチ土層断面、E トレンチ土層断面
図版4 1号小豎穴、1号小豎穴及び1号土坑
図版5 2号土坑、3号土坑
図版6 出土繩文土器、出土石器
図版7 出出土師器1、出土土師器2
図版8 調査風景1、調査風景2、調査見学風景

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位 置

上の林遺跡は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地他、北緯 $35^{\circ}54'08''$ 、東經 $137^{\circ}59'02''$ の地点で、県立箕輪工業高等学校の敷地内に位置する。本遺跡は、天竜川右岸段丘上にあり、西方より流れる帶無川の扇状地末端部にある。標高は710mで、ここは眺望もよく、南に仙丈岳、北には守屋山を望むことができる。また、天竜川対岸の三日町区や段丘崖下の水田地帯が展望できる。天竜川との比高差は約40mを計る。



第1図 位 置 図

第2節 自然環境

箕輪町は、西は木曾山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曾山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円錐層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の尖端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜疊層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な氾濫原を見ることができる。

上の林遺跡は、この河岸段丘の尖端部にそって帯状に連なる遺跡群の一つであり、上記通り恵まれた自然環境の中に存在しているといえよう。



上空より遺跡を望む

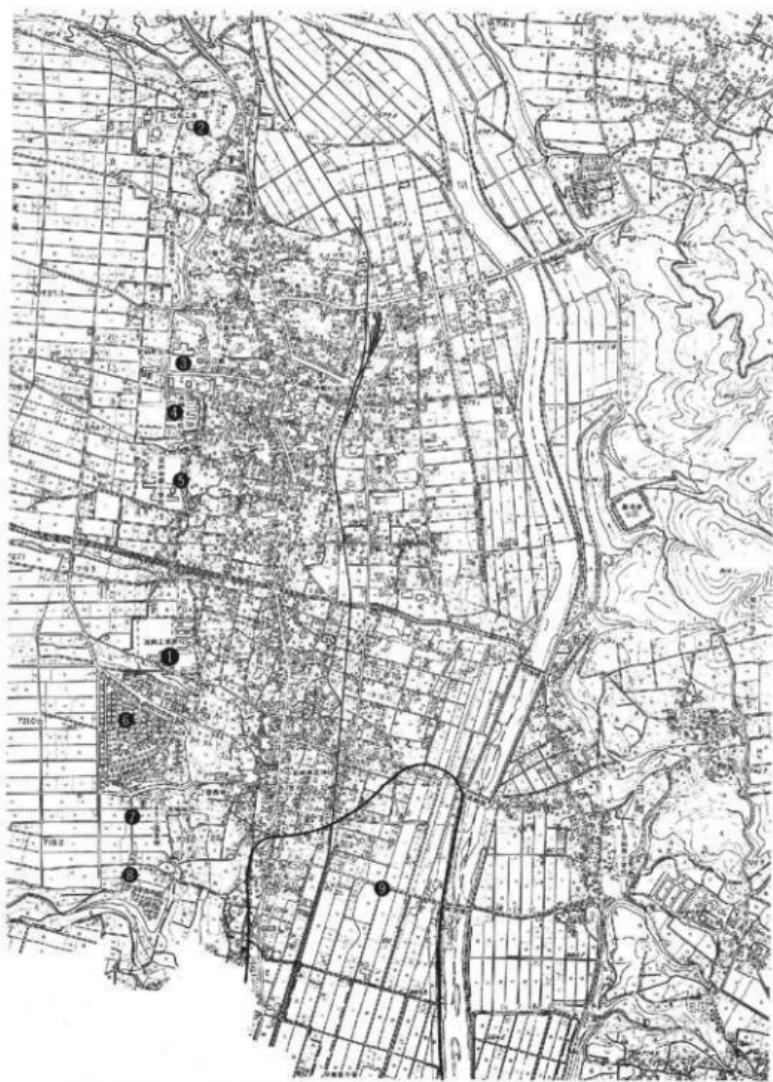
第3節 歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176ヶ所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡（1～8）と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在する遺跡の2つに大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・奈良・平安の各時代の集落址の一端を探ることができた。また、段丘崖下には古代水田址である広大な箕輪遺跡が広がる。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	
1	上の林	木下	段丘		○	○		○		昭和55、56、57、60 平成2年に発掘調査 今回調査
2	王墓古墳	松島	段丘				○			
3	本城	松島	段丘		○			○		
4	中山	松島	段丘		○			○		昭和59、60、62年 発掘調査
5	藤山	松島	段丘		○			○		
6	北城	木下	段丘			○		○	○	昭和47年 発掘調査
7	南城	木下	段丘		○			○	○	昭和51年 発掘調査
8	猿楽	木下	段丘			○			○	昭和49年 発掘調査
9	箕輪	三日町木下	平地		○	○	○	○	○	昭和55、56、57、58 平成2年 発掘調査



- ① 上の林 ② 王墓古墳 ③ 本城 ④ 中山
 ⑤ 藤山 ⑥ 北城 ⑦ 南城 ⑧ 猿楽 ⑨ 其輪

第2図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

遺跡の広がる一帯は、現在県立箕輪工業高等学校の敷地としてそのほとんどを占めている。また高校が移転される以前は、田・畠または公園として土地利用されており、耕作中及び公園造成時において、数多くの遺物が出土し、採集されたと伝えられている。更に、高校が当地に移転した際、校舎などの学校施設の建築時においても遺物の出土がみられ、町郷土博物館にその一部が保管されている。また、昭和55～57年・60年の4次に渡る校舎の老朽化による改築工事また、平成2年のクラブ練習室建設に伴った発掘調査が実施され、多くの遺構・遺物が出土し縄文時代早期から平安時代まで断続的に集落が営まれてきた複合遺跡である事が判明した。

今回、小体育館の建設が本年度に入り具体化したため、県教育委員会文化課、学校関係者、町教育委員会の間で建設予定地の埋蔵文化財に対する保護協議を行い、6月末に確認調査を実施した。その結果、遺構・遺物が確認できたため、再度三者間での保護協議となり、本発掘調査を実施し記録保存をすることとなった。過去における発掘では、大きな成果を残しているので、今回の調査にも学校関係者を含め多くの方々の注目を浴びていた。

調査は、このような経過によって町教育委員会が県教育委員会より委託を受けて、新たに調査団を編成し、調査を実施する運びとなった。

第2節 調査団の編成

調査団

団長 橋口 彦雄

調査主任 赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員

調査員 福沢 幸一 長野県考古学会员

調査員 根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員

調査員 宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

団員

井上武雄、遠藤 茂、大槻泰人、岡 章、岡 正、春日義人、唐沢光國、小池久人、

小嶋久雄、後藤主計、笠川正秋、戸田隆志、中坪袈裟男、野村金吉、伯耆原正、堀五百治

松田貫一、松田幸雄、水田重雄、向山幸次郎、山口今朝人、山口昭平、清水すみ子

事務局

堀口 泉 箕輪町教育委員会教育長
上田 明勇 箕輪町教育委員会社会教育課課長
原 宏三 箕輪町教育委員会社会教育課係長
柴 登巳夫 箕輪町郷土博物館主任学芸員
石川 寛 箕輪町郷土博物館学芸員
赤松 茂 箕輪町郷土博物館学芸員
酒井 峰子 箕輪町郷土博物館臨時職員
根橋とし子 箕輪町郷土博物館臨時職員
宮脇 陽子 箕輪町郷土博物館臨時職員

第3節 調査日誌

- 6月23日（火）曇後雨 確認調査開始。調査区に4本のトレンチを設定し、重機による掘削を行った。小豊穴、土坑を確認。みのわ新聞社が取材に来た。
- 6月24日（水）雨 室内作業。
- 6月25日（木）晴 各トレンチの壁削り、小豊穴の半掘及び土層断面測量を行った。
- 6月26日（金）晴 各トレンチの壁削りと土層断面測量を行った。小豊穴全掘及び平面測量を行った。学校関係者が見学に、また、みのわ新聞社が取材に来た。
- 6月29日（月）曇 各トレンチの土層断面測量と土坑の全掘を行った。また全体測量を行って、確認調査を終了した。
- 9月28日（月）晴 本調査開始。重機により表土を剥ぎ、遺構上面確認を行った。
- 9月29日（火）雨 室内作業。
- 9月30日（水）雨 室内作業
- 10月1日（木）晴後曇 遺構上面確認。
- 10月2日（金）晴後曇 遺構上面確認。
- 10月3日（土）晴 遺構上面確認。
- 10月5日（月）雨 室内作業。
- 10月6日（火）晴 遺構上面確認を行い、土坑2基が確認された。
- 10月7日（水）晴 土坑の全掘、平面測量、全体測量を行った。機材を撤収し、調査を完了した。

第III章 遺跡の状態

第1節 調査方法と結果概要

調査は、開発行為が及ぶ小体育館建設用地（第3図）およそ1,000m²の全面積を対象に調査範囲を計画し、土層堆積状況と遺構の存在及びその状態を探るために確認調査を行い、そしてその結果に基づいて範囲を限定し、本調査を実施した。

確認調査は、初めに調査範囲の測量を行い、トレンチをAからEまで5本設定した（第4図）。各トレンチはすべて重機を使用し、層位を確かめながら慎重に掘削を行った。掘削は、確認された自然堆積層の直上まで約50から60cmを行い、その後は人力による掘削と遺構上面確認、そして土層断面の壁削り、測量・写真・土層観察等の記録作業の順に進めた。その結果、遺構はAトレンチより火焼状況を示す小堅穴遺構と土坑の各1基ずつ検出され、後述する土層堆積状況をも考慮し、調査範囲のおよそ東側においてこの他の遺構の存在する可能性があるとの結論が得られた。

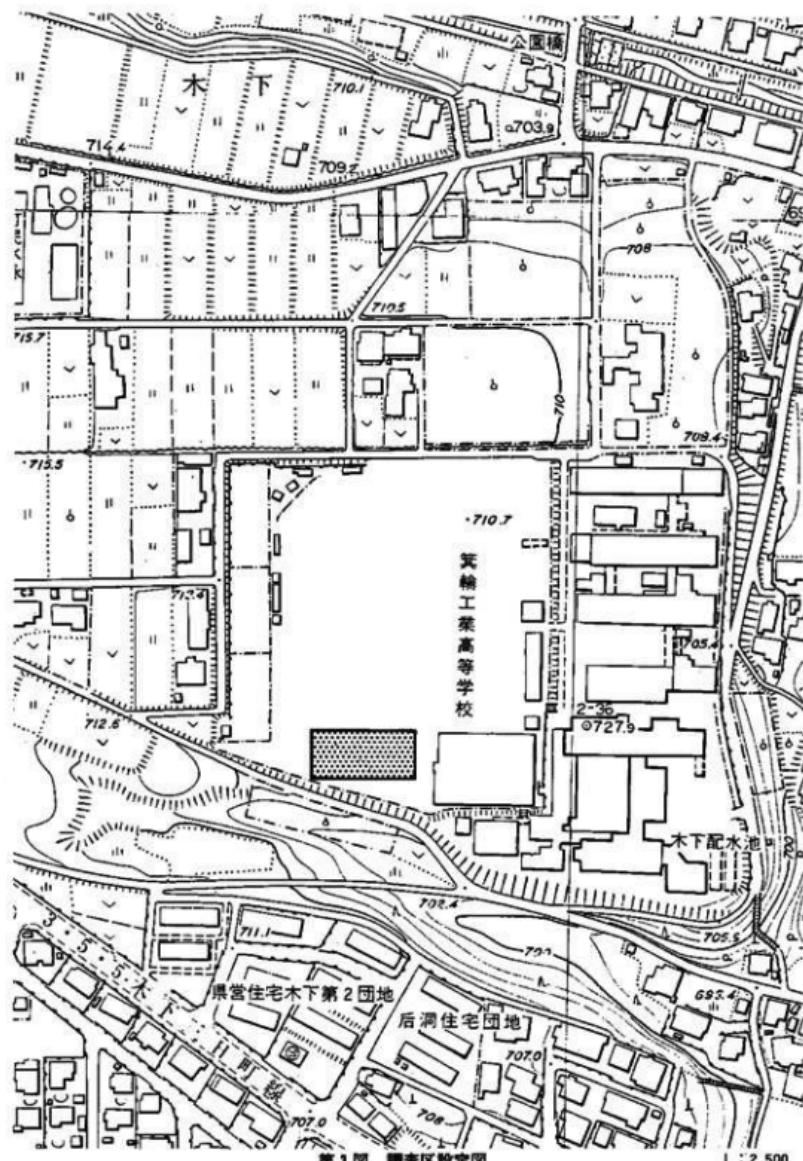
上記の結果を基に、改めて調査範囲内東側約500m²を限定し、南北方向に主軸を併せて5m四方のグリッドを任意に設定し、本調査を実施した（第5図）。その結果新たに2基の土坑を検出している。

第2節 土層堆積状況（第6図）

天竜川西側の扇状地上（河岸段丘上）における地質構造は、耕作土などの黒褐色腐食土→ローム層→砂岩・粘板岩を主体とする円礫層・砂層という堆積状況が普遍的にみられ、河岸段丘上の尖端部に位置する本遺跡もこれを基本としている。

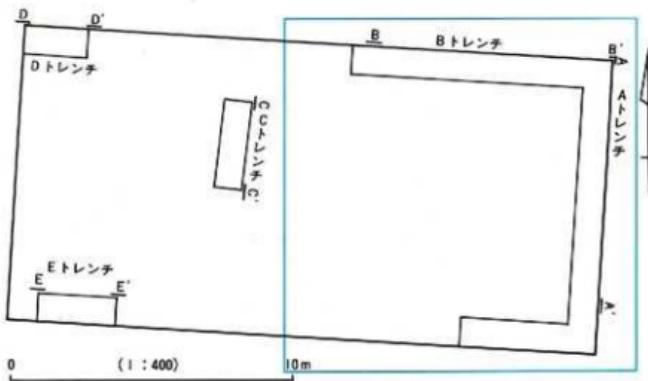
確認調査の結果、設定した5本のトレンチのうち、AからDまで基本的に同一の堆積状況を示していた。そして遺構が確認されたV層までの上層各位すべてが、グランド造成を主とする盛り土（人为的堆積土）と確認された。また盛り土は、調査範囲の東側に向かって厚くなり、西側はむしろV層はおろかVI層まで削平されていた。しかし盛り土の厚い東側一帯においても検出遺構の保存状況の悪いのは、遺構構築面を含むV層をかなり削平しているものと判断した。遺物も土の運搬とともに破片となって、III及びIV層を中心に混入するものと推測した。いずれにしても、調査地の更に東側（現体育館）に向かうほど遺構の存在と保存状況が良好と考えられるが、本調査範囲においては極めて良好とは言えない結果であった。

尚、Eトレンチにおける土層堆積状況は、南側に隣接する后洞の傾斜地に、恐らくグランド造成時に押し出された人为的堆積土と思われる。

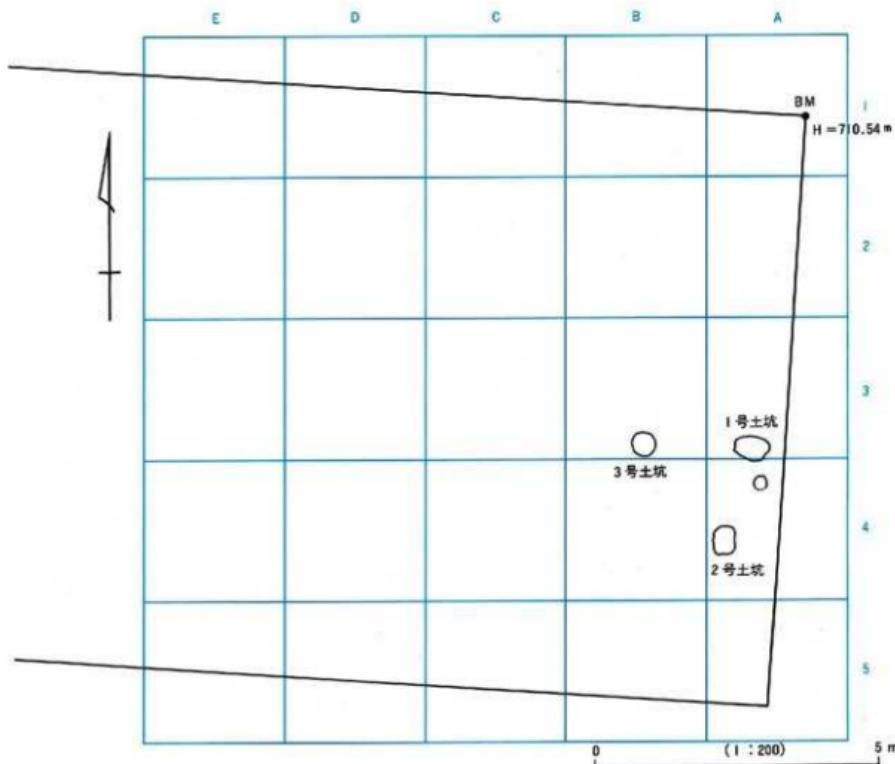


第3回 調査区設定図

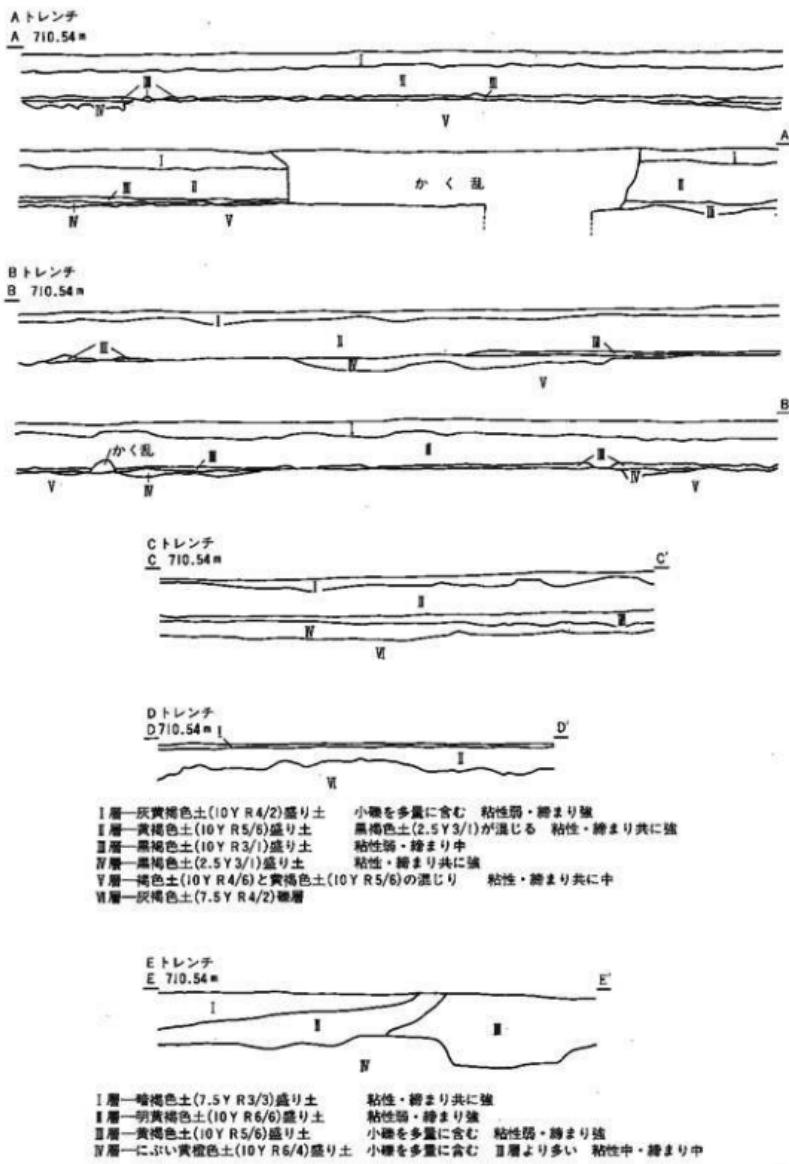
I : 2,500



第4図 トレンチ設定図



第5図 グリッド設定設定及び造構配置図



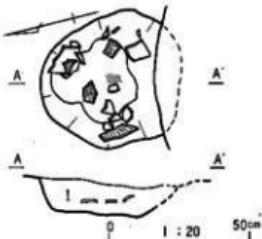
第6図 土層断面図

第IV章 遺構と遺物

第1節 出土遺構

1. 小堅穴

A-3グリッドに位置し、確認調査におけるAトレンチ内V層確認面が本遺構の検出面である。規模は最大幅55cmを測り、やや不整ではあるが円形プランを呈する。掘り込みは、ほぼ平らであり鉢状に立ち上がり、断面は台形である。また深さは12cmを測る。これは、トレンチにおける土層堆積状況から、本遺構の上部が削平されているものと考えられる。また壁及び底面には、著しい火焼状況を示す焼土の付着が認められた。覆土は、明茶褐色土の單一層で、粘性・締まり共やや認められ、ブロック状の焼土・炭化物・ロームブロック等が含まれる。



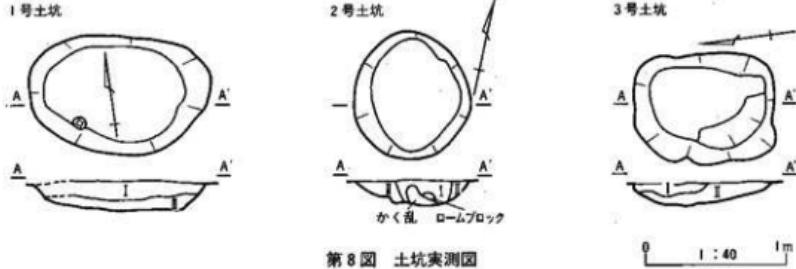
第7図 小堅穴実測図

遺物（第9図-7）は、覆土または底面ほぼ直上より長胴壺一個体が破片となって出土している。口縁部が短く外反し、胸部はやや膨らみを見せる形態で、内外面共条痕を思わせる荒めのハケ調整を行い、また口縁端部は面取りがなされる。

2. 土坑

確認・本調査を通じて3基の土坑が検出されている。いずれもV層確認面が検出面で、掘り込みは浅く遺物の出土もなく、その性格は不明である。

1号土坑 A-3グリッドに位置する。128×87cmの規模で、梢円形を呈する。深さは20cmを測り、断面は梢円形である。覆土は2分層される。1層は黒褐色で、粘性・締まり共に強くロームブロックを多量に、炭火物・焼土をまばらに含む。2層は黒褐色土で、粘性は強いが締まり



第8図 土坑実測図

は1層よりやや弱い。またロームブロックをまばらに含む。

尚、遺物の出土は認められなかった。

2号土坑 A-4グリッドに位置する。90×84cmの規模で、ほぼ円形を呈する。深さは10cmあまりで浅く、断面は半円形ではあるが底面に細かな凸凹がみられる。また覆土は2分層される。1層は暗茶褐色土で、締まりはややあるが粘性はほとんど認められなく、炭化物及びローム粒子をまばらに含んでいる。2層は暗茶褐色土で、締まりはややあり粘性は1層と比べて強い。ロームブロックをまばらに含んでいる。

尚、遺物の出土は認められなかった。

3号土坑 B-3グリッドに位置する。110×78cmの規模で、ほぼ橢円形を呈する。深さは15cmで、断面は半円形である。覆土は2分層される。1層は黄褐色土で、粘性締まり共に強く、まばらに黒褐色土が混入する。2層は黄褐色土で、粘性締まりは共に1層より弱く、暗茶褐色土がまばらに混入する。

尚、遺物の出土は認められなかった。

第2節 出土遺物

1. 繩文土器（1～4）

繩文土器は、前期後葉から中期初頭に位置づけられるものが主体であるが、土器そのものが土師器であるのか繩文土器であるのか判別しがたい小破片ばかりで、かつその量も少ない。

1. 2は、地文に半截竹管状工具で沈線を施し、結節状浮線文とボタン状貼付文の組み合わせによる文様構成で、波状口縁を呈するものである。3は、円形浮線文とヘラ切りによる浮線文を施すものである。4は、半截竹管状工具による縱位沈線文である。

2. 石器（5・6）

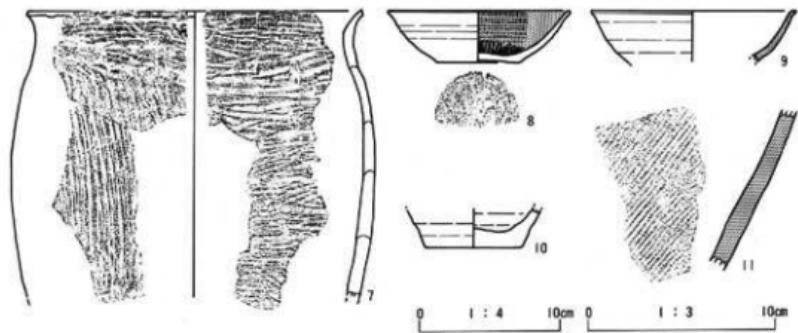
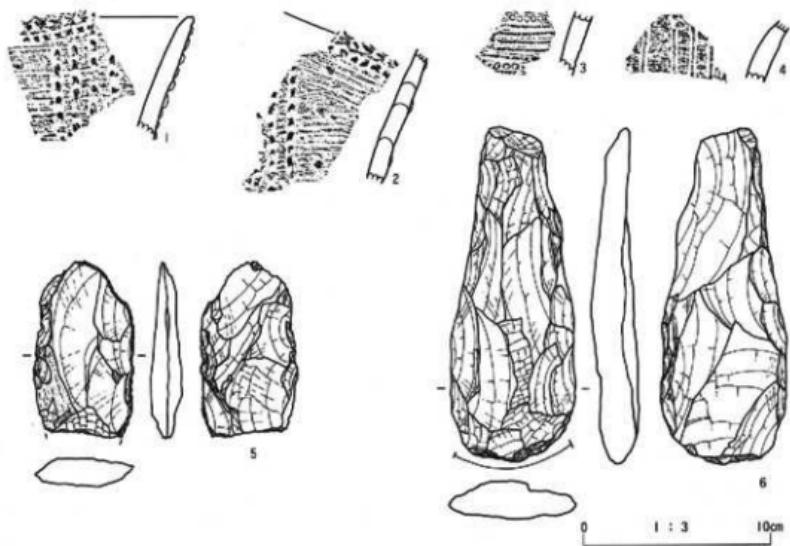
打製石斧2点のみが出土している。1は、頁岩製の小型品で、刃部の後退が認められる。2は、粘板岩製のばち形に属する中型品で、表面の風化が著しい。

3. 土師器・須恵器（7～11）

出土した土師器及び須恵器は、平安時代に属するものが主体である。遺構に伴うものは7の長胴壺のみで、かつ繩文土器と同様に小破片が主で出土量も少ない。

土師器は、内外面ハケ調整（7）とナデ調整の2種の長胴壺、ロクロ整形による小型壺（10）、ロクロ整形による内面黒色処理を施すツキ（8）が確認できる。

須恵器は、ツキ（9）、大壺（11）が出土している。



第9図 出土遺物実測図・拓影図

第V章　まとめ

確認調査・本発掘調査を通じ、縄文時代、平安時代の各遺跡・遺物が出土し、上の林遺構の範囲を知る上で、大きな成果があったと言える。遺構の性格が不明な点の多い出土状況で、かつ遺物の出土も散発的であったが、火焼状況を示す小窓穴遺構にみられるように、平安時代の居住施設の一部とも勾わせる遺構の存在は、平安時代の集落がここまで広がることを多いに示唆するものと言える。

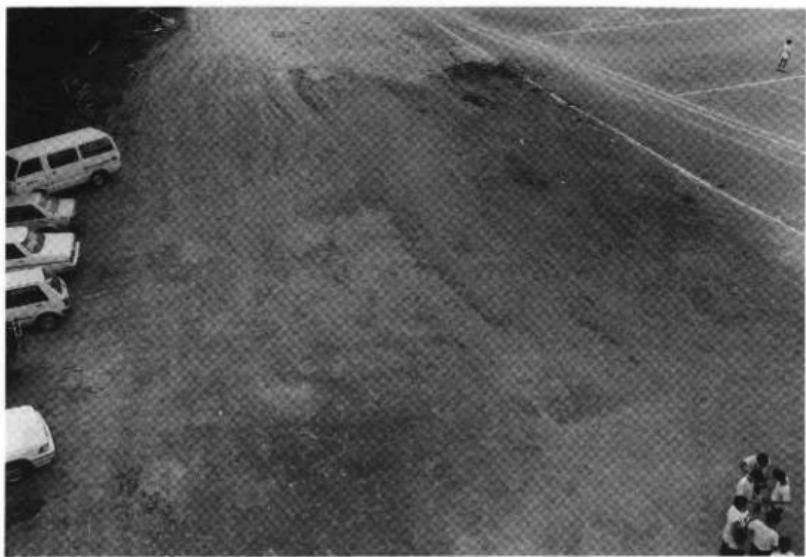
上の林遺跡の調査は、箕輪工業高校校舎改築等に伴い、過去5度に渡って行われ、縄文時代・弥生時代・平安時代の集落址を中心とした複合遺跡として、学術的に大きな成果を得てきている。今回の調査地は、これまでよりも西側に位置し、遺跡の広がりを確認するためにも、非常に大きな目的と意味があった。調査結果においては、遺構・遺物の存在が確認され、多大な成果があった反面、これ以前に行われたグランド造成を中心とする開発行為によって、地下遺構への影響が及んでしまっていたというやや残念な結果でもあった。しかし今回の調査は、今後予測される開発計画に対し、遺跡の保護を行う上で大きな参考資料となることは言うまでもない。

末筆ではありますが、今回の調査に際して格別なご理解とご協力をいただきました、学校関係者の方々を始め、団員の方々に改めてお礼申し上げたいと思います。

参考文献（著者、編者名50音順）

今村啓爾	1982	「諸磯式土器」縄文文化の研究3 雄山閣
岡谷市教育委員会	1974	「扇平遺跡」
長野県教育委員会	1987	「大洞遺跡」県中央道長野線埋蔵文化財調査報告書1
長野県史刊行会	1981	長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表
長野県史刊行会	1983	長野県史 考古資料編 全1巻(3) 中・南信版
長野県史刊行会	1988	長野県史 考古資料編 全1巻(4) 遺跡・遺物
三上徹也	1987	「梨久保式土器再考」長野県埋蔵文化財センター紀要1
箕輪町教育委員会	1981	「上の林遺跡(第1・2次)」
箕輪町教育委員会	1982	「上の林遺跡(第3次)」
箕輪町教育委員会	1986	「上の林遺跡(第4次)」
箕輪町教育委員会	1991	「上の林遺跡(第5次)」
箕輪町誌編纂刊行委員会	1976	箕輪町誌 第1巻 自然・現代編
箕輪町誌編纂刊行委員会	1986	箕輪町誌 第2巻 歴史編

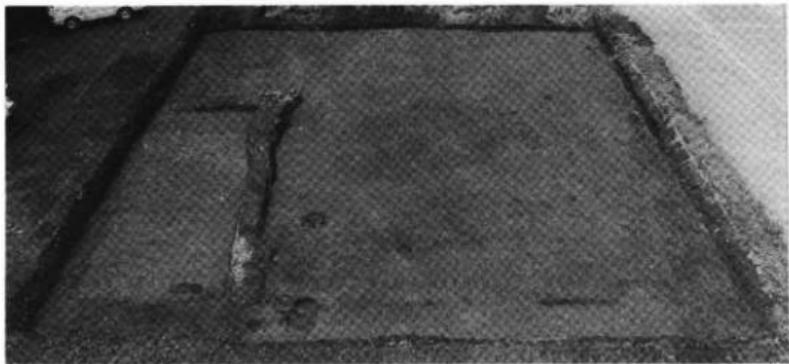
図 版



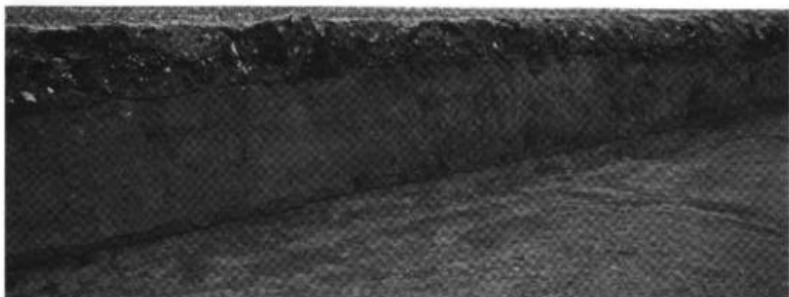
調査前近景（南東より）



トレンチ掘削状況（東より）



調査区全景（東より）



A ドレンチ土層断面



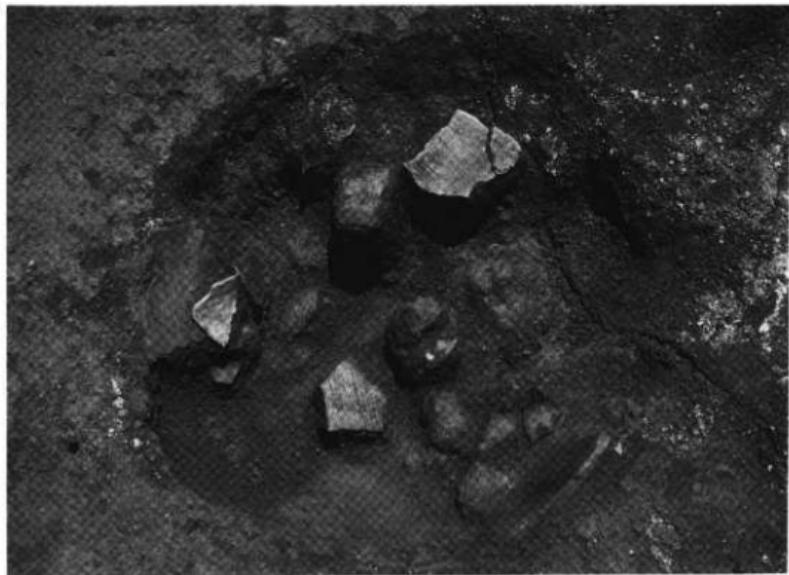
B ドレンチ土層断面



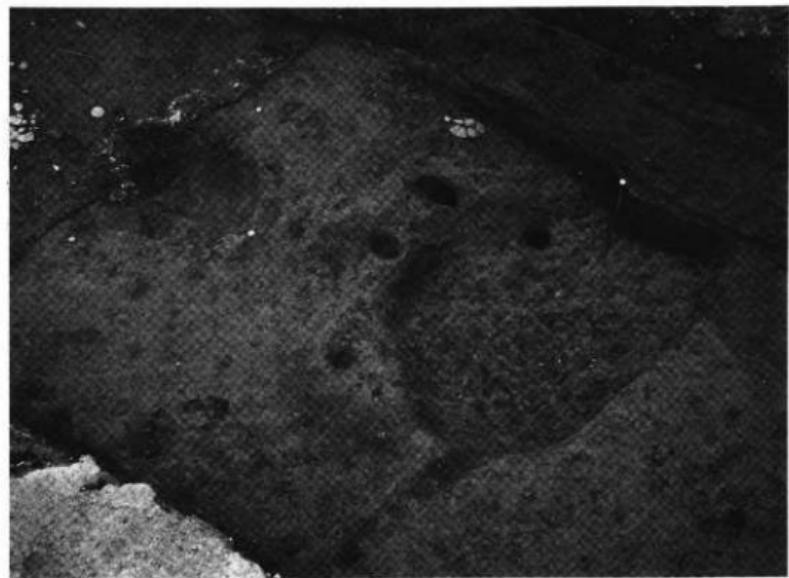
C トレンチ土層断面



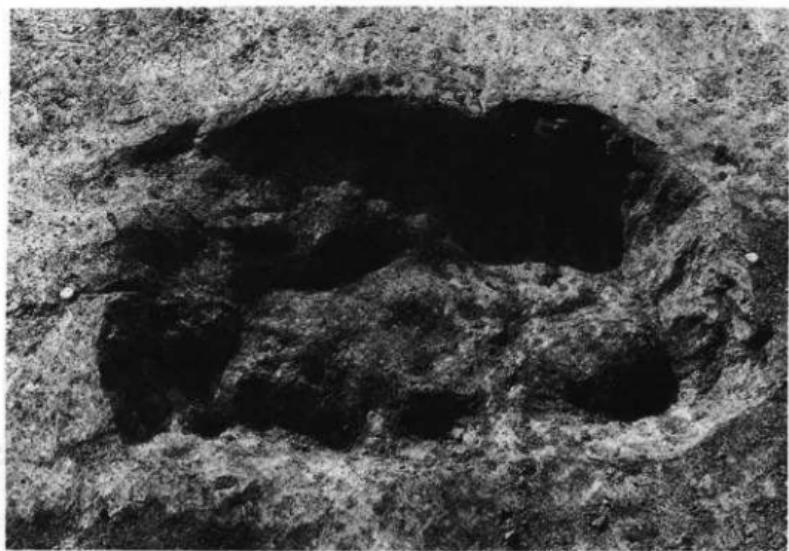
E トレンチ土層断面



1号小堅穴



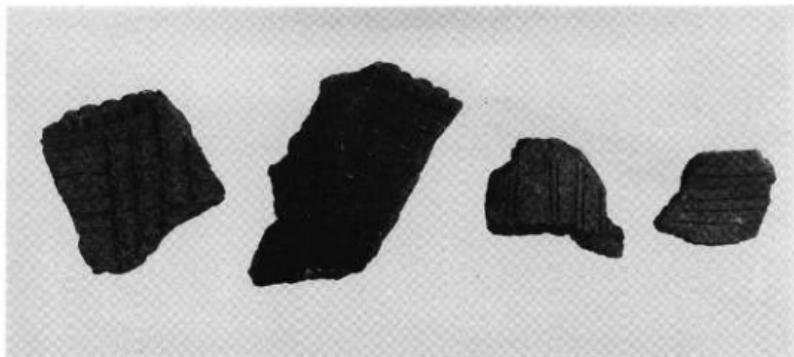
1号小堅穴及⑥1号土坑



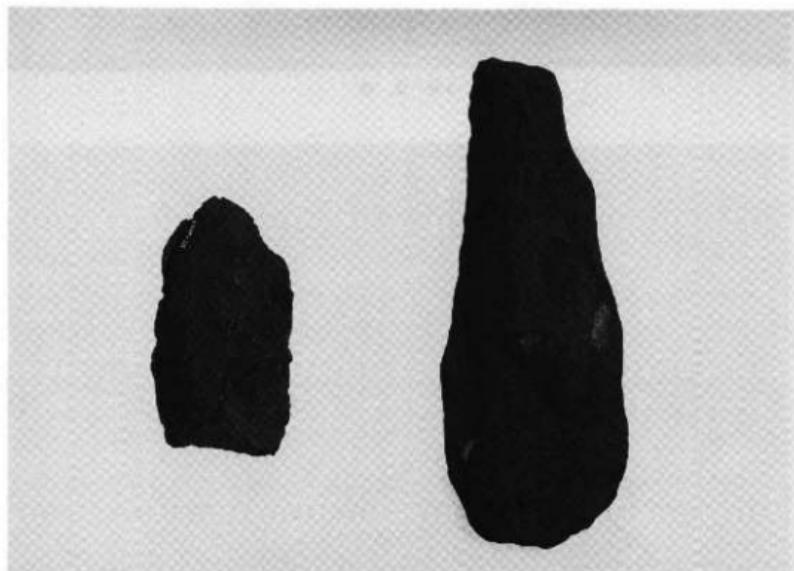
2号 土坑



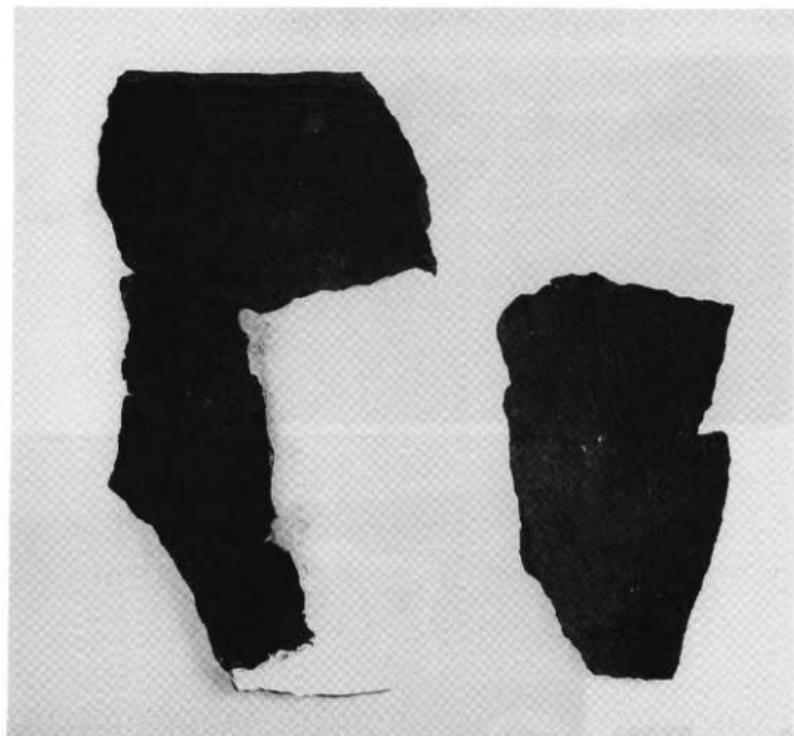
3号 土坑



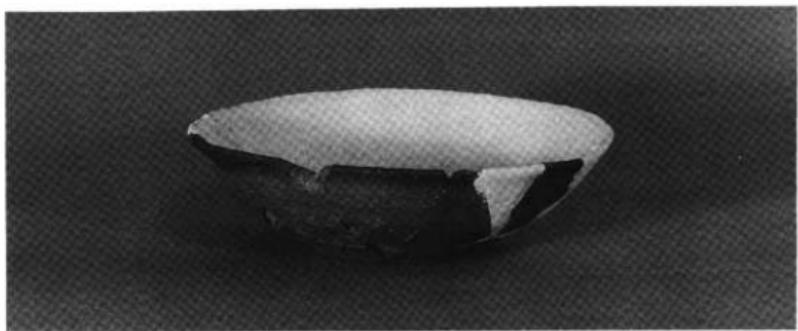
出土繩文土器



出土石器



出土土師器 1



出土土師器 2



調査風景 1



調査風景 2



調査見学風景

上の林遺跡

長野県箕輪工業高等学校小体育館建設に伴
う上の林遺跡の第6次緊急発掘調査報告書

平成5年3月25日 印刷

平成5年3月25日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 日本ハイコム株式会社